

育てよう命の大切さ（見て、触って、感じて）

— 七宝町立北部保育園 —

1 実践のねらい

- ・実際に見て、触って、五感で感じる実体験をとおして動物にも命があることを知り、命の大切さに気づかせる。
- ・育てる喜び、育てた野菜を食べることで、命をいただくことへの感謝の気持ちを育てる。

2 実践の内容

(1) ミニトマトの栽培（5月～8月）

- ・5月。「これがトマトになるの?」、「芽ってなあに?」、などの質問や疑問が飛び交い興味津々。「大きくなーれ。」と声をかけながら種まきをした。
- ・発芽し、本葉になった頃を見計らって移植をした。大切に育てようとする心が育つようみんな話し合う機会も作った。
- ・6月。黄色い花が咲き、「トマトの花は黄色なんだ。」と実感した。
- ・緑色の実が付き、取れないように注意しながら水やりをした。
- ・7月。自分が育てた赤いミニトマトを収穫し、「甘い。」「おいしい。」と味わった。トマトが苦手な子も「自分が育てたトマトだから食べる。」と頑張ってお食べた。
- ・8月。赤い実がたくさん付き、大きく成長したミニトマトは家庭に持ち帰り、引き続き育て、収穫してもらった。
- ・種から育て、赤い実を付けるまでには、暑い時期の水やり、鉢がひっくり返り、せっかくだけ付けた実が落ちたり、虫に葉や実を食べられたりと苦労やハプニングもあったが、一人一鉢を大切に育てることができた。
- ・年長児は観察記録を取ったことにより、植物の成長過程を学び、観察力も身についた。



(2) 夏野菜の栽培（4月～9月）

- ・プランターに夏野菜（きゅうり、なす、トマト、ピーマン、など）の苗を植え、成長を観察し、収穫して食べる喜びを味わった。野菜によって花の色や形が違うこと、実の付き方の違いなどに気づくことができた。
- ・園児が収穫した野菜は、給食の食材の一部となり、「今日の給食のスパゲッティには、〇〇組さんが収穫してくれたピーマンが入っています。残さないでおいしくいただきますよ。」と、その都度放送をいれた。子ども達は放送を楽しみに待ち、嫌いだった野菜も食べるようになった。

(3) さつま芋の栽培（5月～11月）

- ・保育士に植え方を教えてもらって苗を植えた。手にした苗を大切に持ち、「大きくなってね。」と苗に話しかけながら、そっと土の布団をかけていた。
- ・「どうして草取りをするの？」との質問に、草にも命があること、草に栄養がいつてしまうと芋が大きくならないので、草取りが必要と話した。汗をかきながら「これだけ取ったよ。」「そっちにもあるよ。」とみんなで協力しながら草取りをした。
- ・全園児での芋堀り。蔓をかきわけ畑に入り、綱引きのように蔓を引っ張り、蔓のしたを掘った。芋が顔を出すと「あった！」と喜び、「でぶ芋ちゃん。」「ちび芋ちゃん。」「でっかいの見つけた。」大喜びのうちに収穫は終わった。
- ・家庭に持ち帰った芋は、後日天ぷらやお芋ごはんにして食べたと報告を受けた。園では園児が芋を洗い、ふかし芋にしていた。芋だけでなく、夏野菜なども大きく育ち収穫するまでに時間と手間がかかることを学んだ。

(4) 移動動物園来園（10月10日）

- ・事前に来園する動物を絵本や図鑑で調べ、ワクワクドキドキしながら移動動物園の来園を待った。当日は、スタッフの方に動物の生態や特徴、抱き方、エサの与え方、触れ合い方を教えてもらった。
- ・両手ですくうようにしてヒヨコを手のひらに乗せ、「フワフワ。」「温かい。」「かわいい。」「ヒヨコがうちした。」と、小さな声で話しながら触れ合ったり、落とさないように注意しながら抱く姿がみられた。
- ・聴診器を使ってモルモットの心臓の鼓動を聴いた後、自分の心臓の音を聴き、鼓動の違いに驚いたり、動物も自分と同じように生きていることが実感できた。
- ・干し草と一緒に手まで食べられそうで、最初はちょっぴり怖くて、ためらう姿が見られた。回を重ねるごとに上手になり、食べる様子を興味深く観察するようになった。
- ・初めて触れ合う色々な動物に、子ども達は好奇心を揺さぶられ、怖がったり、驚いたりする中で動物の立場になって優しく抱いたり、首に巻いたりして触れ合うことができた。



3 おわりに

- ・夏野菜、ミニトマト、さつま芋を栽培し、収穫体験をしたことで生きている命をいただいていることを知る良い機会となった。
- ・育て収穫した野菜を給食として提供したことで、野菜嫌いが軽減され、食材にも関心が向き食育へと繋げていくことができた。
- ・動物と触れ合うことで動物のぬくもりを肌で感じ、生き物には命があることを体験できた。
- ・今後も栽培や動物との触れ合いを実践し、大切に優しく接することができる環境を整え、命を大切にする心が育つ保育に取り組んでいきたい。

生命に触れ感じる保育～畑を中心とした命のつながり～

— 美和保育園（社会福祉法人美和保育園） —

1 実践のねらい

近年、児童の犯罪、特に生命を奪うことに繋がるような事件が多く発生してきた。こうした背景の一つには「生命」そのものを子ども自身が感じられる直接的な経験が、以前と比べて大きく失われていることが挙げられる。その理由には、核家族化や地域のつながりの喪失に伴う人の誕生や死に会う機会の減少、効率化や省力化が求められる中で、食べ物が命ではなく商品となっていくことなどが考えられる。こうした子どもの状況に対して、心の教育や食育の必要性が強調されている。本園では以下のねらいを基に、子ども達が直接体験を通して命を感じる経験をすることで、命を大切にすることを育てる基盤となるよう、保育内容の充実を図った。

- ・栽培活動を通じて、動植物と直接触れ合い、命の育みや尊さを知る
- ・給食の生ごみから作る肥料を使うことを通して、命のつながりに気づく
- ・友達と協力して栽培活動をすることで、協調性や思いやりの心を育む

2 実践の内容

(1) 保育園に隣接する畑で年間を通じて野菜等を栽培する

○夏野菜の栽培

5 / 26 (月) 夏野菜の苗植え、種まき

農業委員の鈴木良弘氏より、野菜のおいしさ、栄養としての大切さ、苗の植え方・種のまき方や水やりの仕方を教えていただく。続いて、畑にトマト、ピーマン、なす、きゅうりの苗と大豆、とうもろこしの種をまく。

その後、毎日水やりと草むしりを年長児が中心となって行う。隣接地のため、保育中に行きやすく、植物の変化を見ることができた。他の年齢の子どもも、通園児や散歩の時に立ち寄りやすかった。

○夏野菜の収穫・お泊り保育

6月下旬より夏野菜が出来始める。世話をしながら、毎日収穫し、その都度、調理員が給食の献立に加えたり、ホットプレートをつかってクラスで食べたりした。普段はなすやピーマン、きゅうりが嫌いという子どもも、みんなと一緒に育てた野菜はおいしそうに食べることができた。7 / 4に行なったお泊り保育では、子ども達が作った野菜を使ったカレーライスを食べ、収穫を喜んだ。



お泊り保育でカレーを食べる

○秋野菜の栽培・収穫

秋なすの収穫のためなすだけを残して、耕運機で鈴木良弘氏に畑を耕していただき、秋野菜の栽培の準備をした。8月下旬に、まずは大根とかぶ、人参の種とジャガイモの苗を子ども達が鈴木氏と一緒に植えた。このとき、生ごみ処理機で作った肥料を畑にまき、子ども達に給食の材料で使えなかったところから畑の栄養となるものを作ることを話し、命が循環する関係を伝える。

11月10日（月）に、大根とかぶを収穫する。このとき、鈴木氏よりかぶの葉を食べてしまう虫とその糞を見せてもらう。子ども達も触ってみたり怖がったりする姿が見られた。

大きな大根やかぶを一生懸命力を入れて抜く。収穫したものを隣接するお寺に供えて、収穫を感謝し、命のありがたさを伝える。



秋の収穫祭

（2）動物の触れ合い

○畑での小動物との触れ合い

畑では、夏はモンシロチョウや天道虫、畑の横を流れる用水から来るかえるなどを子どもが見つかり、畑での活動中に子どもが捕まえたり追いかけたりする姿が見られた。

○移動動物村

12月10日（水）に移動動物村が来園した。ポニーやアヒル、小鳥との触れ合い、犬のショーなど、子ども達は動物と楽しく触れ合うことができた。

予定では、自分たちで作った人参やその葉をポニーなどに食べさせてあげてをを考えていたが、前日までの天候が悪く、人参が収穫できなかつたのが残念だった。



移動動物村

3 おわりに

命を大切にすることを育むことは、特別なことをすることよりも、むしろ日常の中で、子ども達が実感することが大切である。そのため、準備や根気はあるが、子どもの生活の場の隣でこうした栽培活動は良かったと思う。また、移動動物村での大きな動物との出会いなど、子どもの心を大きく揺さぶる機会も大切である。こうした日常の活動と行事が体系的かつ継続した取り組みとなるよう、本活動を踏まえて保育課程や指導計画に位置づけていきたい。

4 参考

- ・農作物栽培の指導は地域の農業委員鈴木良弘氏に依頼した。
- ・「げんきをつくる食育えほん」吉田隆子作せべまさゆき絵 金の星社

アタック & ディフェンス ～ スポーツ活動を通して～

— 甚目寺町立聖徳保育園 —

1 実践のねらい

- いろいろなスポーツ活動を通して、命の大切さがわかり自分や友達に起こりうる危険から身を守ろうとする心を育てる。
- いろいろなスポーツ活動を体験する中で、ルールを守ることの大切さや自分で判断する力、決断し行動する力が身につく自分や友達の命が守れることを知る。

2 実践の内容

(1) 子ども達に対するスポーツ活動の実践内容

回数	テーマ	内 容
1	解剖生理学から 「命を守る」	<ul style="list-style-type: none"> ・体の動かし方を知る ・話を聞いて行動する ・体のバランスを考えて行動する
2	レクレーション学 から「命を助ける」	<ul style="list-style-type: none"> ・バランス感覚を身につけて遊ぶ ・運動用具を上手に使う遊ぶ
3	協力仲間 「危ないところから逃げる」	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と協力して逃げる ・ルールを守り協力して勝つ ・自分だけ助かるのではなく友達をも助ける
4	集団行動 「反射的な動き」	<ul style="list-style-type: none"> ・話をよく聞いて一緒に行動する ・自分で判断して行動する ・仲間意識を持つ
5	集団行動レベル1 「しっぽ取り」	<ul style="list-style-type: none"> ・しっぽ取りを体験する中で、自分のしっぽを守る ・守ることが出来たら攻撃をする ・仲間と作戦を考えて行動する
6	集団行動レベル2 「友達と逃げる」	<ul style="list-style-type: none"> ・早く逃げようとする意識を持つ ・安全に早く逃げる方法を考え行動する
7	集団行動レベル3 「ボールから逃げる」	<ul style="list-style-type: none"> ・どの動きが身を守るかを考える ・体の自由がきかないとき、どうするのかを考えて行動する
8	リーダーの必要性 「競争をする」	<ul style="list-style-type: none"> ・自分勝手な行動をしないで、友達と一緒に考える ・相手の話しを聞いて理解する ・リーダーの掛け声で動く大切さを知る

○ 子どもの育ち

- ・ いろいろなスポーツ活動を体験する中で、勇気を持って行動しようとする気持ちと体を使って自ら身を守ろうとする意欲の芽が養われた。
- ・ 子ども達の年齢や体格、運動能力の違いがあっても、自分なりに方法を考え行動しようとする姿が、遊びの中で見られるようになってきた。



(2) 保護者を対象にしたスポーツ活動の実践内容

- 身近に起こりうる災害から身を守るためには、自分で判断し瞬時に行動する力が大切であることを知り子どもとともに今までの活動内容を体験した。
また、講師から機敏性を養う遊びや子どもの身を災害から守る方法を学んだ。



3 おわりに

『生きる力』

- 子どもの運動能力は、危険から身を守ろうとする動き（平衡感覚）と関わりがあり、年齢に応じたスポーツ活動を通して身につけられることが分かった。今後も引き続き、日常保育の中で今まで経験した遊びを行っていくことで「命を守る」意識を育てていきたい。
- スポーツ活動は、指導者が意図的に経験させることで、子どもに「腕の力」「早い動き」「安全に対する意識」「やろうとする勇気（アタック）」などが伸びていくことが子どもの育ちの中で感じる事ができた。

4 参考

指導講師 盛崎 強氏（株式会社東海スポーツ）

どの子のいのちもだいじだよ！

— 蟹江町立須成保育所 —

1 実践のねらい

- 子どもが、周りの大人から愛され大切に育てられていることを認識し、自分の命、他人の命を大切にしようとする心を育む。
- 食育の実践を通して、家庭の機能が子どもにとって望ましい姿となり、親子の心の通い合いが深まるようにする。

2 実践の内容

(1) 赤ちゃんをだっこ体験

- 年長児が、6月下旬に出産予定の当保育所のM保育士の、胎児の写真を見せてもらったり、聴診器を使ってお腹の中の音を一人ずつ聞く体験をした。子ども達の聞いた音は、「ドキンドキン」「ドクドク」「ドクッドクッ」「チャカチャカ」「ゾー」等だった。

お腹の中の赤ちゃんに心を込めて、「元気に生まれてきてね」と呼びかけた。見えない赤ちゃんが確かに生きていることを、自分の目や耳で実感した。自分の心臓の音も聞いた。



- 9月 6月の終わりに男児を無事出産したM保育士が赤ちゃんとともに保育所に来た。年長児に、自分の妊娠、出産、育児について、大変だったこと、うれしかったことなどの話をした。その後、年長児一人一人の子どもが、赤ちゃんを抱っこさせてもらって、その感触を味わった。



自分たちも、おかあさんのお腹の中にいた時から今日まで、周りの大人の人達からこんなふうに大切に育ててもらって大きくなったんだ、ということを感じてくれたと思う。

- 担任の保育士が、「自分の命も他の人の命も大切なもの。誰の命であっても、なくなったらとても悲しむ人があるんだよ」と語りかけた。
- 年長児の保護者より、保育所の誕生会に向けて、子どもの生まれた時の様子や子育ての中でのエピソードを書いたメッセージカードをいただき、誕生会の日に担任保育士が子ども達に読み聞かせ、その内容について話し合った。またその都度、両親

や祖父母等へ「感謝の気持ちを持とう」「自分の命も友達の命も大切にしよう」と話した。

(2) お米と野菜づくり

○ 家庭が子どもにとって正常な機能を果たしていれば、子どもは自他ともに命を大切に
する気持ちがおのずと育まれると考える。親子の信頼関係を損なうことなく、子
どもが成長していく上で、毎日の食事は大きな位置を占めると思う。そこで、保育
所での食物の栽培を通して、家庭へいろいろな働きかけをしていった。

○ 年長児が、稲のバケツ栽培に挑戦。近所のおばあちゃんの家で種籾や肥料をもらい
に行くところから始まった。お米の収穫後は、ペットボトルと割り箸を使って脱穀。
すり鉢の中で野球のボールで籾摺り。1月にポン菓子屋さんに来てもらい、できた
てのポン菓子をいただいた。



○ 保護者会の役員の協力も得て、サツマイモ、ミニトマト、キュウリ、ピーマン、ナ
スの栽培をした。たくさん獲れて家庭へ持ち帰って食卓に。年長児の保護者から家
庭でのクッキングや食事の様子などのメッセージを寄せてもらい、保育所だより
に掲載した。子ども達がとてもはりきってお手伝いをしたり、嫌いな野菜も自分達
が作ったものなので、喜んで食べたりした様子を知らせてもらえた。

○ 上記の経験を経て、親子クッキングを開催。講師の先生を迎えて、市販のカレー
ーを使わないで、いろいろな野菜をミキサーにかけたものとカレー粉、それに形を
残した肉や野菜をトッピングしたカレーライス。デザートには黒糖寒天。

講師の先生より、「子どもを産んだら、離婚は絶対に避けて。母は夫に『ありが
とう』の言葉を忘れず、いつも誉めて、子どものためにも夫婦は円満に生活しまし
よう。」と、保護者向けの講話もいた
だいた。



3 おわりに

○ 毎月の保育所だよりで、「命」「食育」について保護者に語りかけた。保護者からの
反応もあり、感じていただけたものがあると思う。両親が協力し合い、子どもの心
に寄り添って子育てをしていただけたらよい、今後とも支援をしていきたいと
思う。

年長児の姿からは、友達関係の深まりを感じる。保育士の、子ども達への思いを忘
れずに成長して行ってほしいと思う。

見て、食べて、触れて、聞いて、感じよう 命の大切さ

— 阿久比町立草木保育園 —

1 実践のねらい

- 動植物に興味や関心を持ち、育て、触れあい、五感を通してやさしい気持ちやいたわりの気持ちを育てる。
- 老人施設を訪問したり老人会のお年寄りと交流をしたりして、高齢者の方への感謝の気持ちや敬愛の心を育てる。

2 実践の内容

(1) 園の花壇でお米づくり、野菜づくり。

○ お米づくりをしておにぎりパーティー

- ・“花壇でお米作りをしたい。”と言う保育士の発案から地域の方に協力してもらい、花壇を田んぼに作り変え、お米作りをすることにした。
- ・れんげ畑で遊ばせてもらい関心を持ち、小学校の田植え見学に行きこお米作りへの興味を深めた後、地域のおじさんの指導で保育園の田んぼに田植えをした。
- ・田んぼの中で、豊年えびやおたまじゃくしなどの存在に気づき見たり触れたりした。登園時に田んぼの様子を見て、自分から世話をしてみようとする姿につながった。また、すずめからお米を守るためのかかしも年長児が協力してつくった。
- ・地域のおじさんの指導で稲刈り、はざかけをし、割り箸で脱穀をした後に精米をしてもらいおにぎりを作って食べた。満腹満足の笑顔が見られた。



田植え



はざかけ



割り箸を使って脱穀



おにぎりパーティー

○ 自分たちで育てた野菜はおいしい

- ・地域の直売所へナス、トマト、キュウリ、カボチャなどの苗を買いに行き、苗植えをし、水やりや草取りをしながら、「花が咲いた。」「赤くなったら食べられる?」「トゲトゲがあった。」と気づき、感動する声も聞かれた。
- ・トマトはもぎたてを、キュウリ、ナスは塩もみや給食センターへ送って麻婆ナスやカレーにしてもらって、カボチャはもち粉と練ってカボチャダンゴをつくって食べた。
- ・春にサツマイモの苗を植え、秋には親子で収穫、焼きいもパーティーをした。

- ・自分達で育てた野菜は美味しく、嫌いな子も「おいしい。」と食べる事ができた。

(2) 親子で菊の花作り

○ きれいな花が咲きました

- ・地域の菊同好会から土や苗をいただき、年長親子が同好会の方々から指導を受け菊の苗植えをした。「菊は水がないと大きくなれないんだって。」といいながら教えてもらった通りに毎日水やりをし、支柱立て、輪台つけをして育てた。
- ・地域の文化祭に出展し、自宅へも持ち帰り花を楽しんだ。



輪台つけ



文化祭に出展

(3) 地域、お年寄りの方との交流

○ 高齢者への感謝の気持ちがありました

- ・老人一日入園、運動会、もちつき会などの行事に老人会の方々が来園。「おじいちゃん、これで遊ぼう。」と、あそびに誘い、触れ合うことができた。
- ・宅老所では3歳児が歌や手遊びを披露し、肩たたきをしたりひざに抱かれて絵本を見たりしてゆったりと過ごすことができた。
- ・地域の老人施設へ訪問をし、太鼓や歌、踊りの披露とふれあいを楽しんだ。また、園の行事に招待して楽しんでもらった。
- ・花壇の花は花サークルから苗をもらい栽培した。イチゴ狩り、芋ほり、ミカン狩りなど地域の農家の方の厚意で、見て、触れて、味わって。五感を通した体験が出来た。



宅老所で肩たたき

3 おわりに

- 今回の実践を通して保育者が意識的に命につながる言葉掛けをしたり、絵本を見せたりする機会が増え、そのことから、子ども達からも「命は大切。」「命はひとつしかない。」など話す姿も見られるようになり命への関心が深まった。
- 色々な実体験の中で五感を通して小さな虫や草花にも命があることや命には限りがあることに気づき、かわいがろうとする姿が見られた。
- 色々な場面で地域とのかかわりが深まった。又、施設を訪問してお年寄りや触れ合う中で、子どもなりに親しみ、敬愛、思いやりなどの気持ちが芽生え育った。
- お米、野菜の栽培を通して小さな種や苗から実が実りまた種に戻る命のつながりを感じ、食物になった実は、自分たちの元気の源となる事を知り、感謝の気持ちへとつながった。
- 今後も保育者が命に対する意識を高め、今回の実践を継続するとともに違う側面からも知らせていける工夫を心がけて行きたい。



もちつき会



老人施設訪問

出会い・ふれあい・心の交流 ～お年寄りとの交流を通して～

— 東浦町立生路保育園 —

1 実践のねらい

- 高齢者介護施設に出かけ、お年寄りと関わることで相手の立場にたって接することや、相手を思いやる気持ちを育む。
- 地域のお年寄りを園に招き、一緒に行事に参加することで自分達のことを温かく見守ってくれる人がいるということを感じ、心の交流を深める。
- 人形劇を通して人に対する思いやりの気持ちを感じとる。

2 実践の内容

(1) 施設訪問

- 通所介護施設ディーサービスセンター 毎月1回訪問

施設を訪れると「かわいいね」「元気だね」「よく来たね」「ここにおいで」と、お年寄りが、笑顔で迎えてくれるので、子ども達は、自分のおじいちゃん、おばあちゃんのように接し、童謡や手話を聴いてもらったり、肩たたきをしながら会話をしたり、握手をするなどして触れ合うことを毎回楽しみにしていた。

お年寄りの方も子ども達に合わせて、一緒に歌ったり手話を真似たりする姿がみられた。



- 特別養護老人ホーム 年4回訪問

初めて出かけた時は、歩行が困難の為、車椅子に座ったままのお年寄りや、病気のためベッドに寝たままのお年寄りを目の前にして、子ども達はどのように声掛けし、接したら良いのか戸惑いをみせた。しかし、歌の発表が始まると自分達の方をジーっと見つめていたり、歌にあわせて手をたたいたり、中には涙ぐむお年寄りもいた。「“こんにちは”って言ったならニッコリ笑ってくれた」「手を少し振ってくれた」と喜び、お年寄りからの言葉はなくても気持ちが伝わり、子ども達の心の中にも“元気でいて欲しい”という相手を思う気持ちが自然に芽生えていたことを感じた。



(2) 地域のお年寄りとの交流

- 4月当初から、「子ども大好き・遊びたい」と定年後のボランティアさんが来園。泣いている子に声をかけてくれたり、抱っこ、おんぶをしてくれたりした。また、登園時の立しゅうや、毎朝、遊具を拭いてくれるなど、子ども達の安全を見守ってくれている。後半は子ども達の遊びの中に入って一緒に遊んでくれている。

子ども達からみれば「おじいちゃん」だが、この、おじいちゃんボランティアさんの表情や口調が、子ども達の不安な気持ちを包み込んでくれる居心地の良い環境を作ってくれた。それはボランティアさんが、子ども一人ひとりの存在をしっかりと受け止め、また受け入れてくれているからこそ、安心して近づくこともでき、登園してくるとボランティアさんを探したり、見つけたりしては駆け寄って行く子もいた。



(3) 人形劇を観る

- 通所介護施設デイサービスセンターの老人を招いて、一緒に人形劇バクによる「みにくいアヒルの子」を観た。お年寄りは、子ども達に会うと「かわいい手」「元気だね」と、会えた喜びを言葉で伝え、子ども達の姿を見るだけでも“うれしい”といった表情が見られた。劇の最中でも、思わず吹き出しそうになる場面、リズムカルな曲が流れたりすると、お年寄りの方から、子ども達に声をかけたり、手を握ったり、体を触って、互いに顔を見合わせては、共感しあう場面が見られた。

人形劇の内容から、「自分とは違う」「みんなとは違う」からとって、偏見の目で人を見ないということを感じ取ることができた。

3 おわりに

- 施設訪問に出かけ、お年寄りとの関わりを通して、自分達の歌を喜んで聴いてくれる姿、涙を浮かべてまで喜んでくれる姿、自分達のことを「かわいい、かわいい」と誉めてもらうことで、子ども達自身も訪問することを楽しみにするようになり、お年寄りに会う喜びを感じていた。交流を重ねるごとに、お年寄りとの接し方についても気づくことができ、自分たちより力の弱い人に対してどのように接すればよいのか、例えば、肩たたきでは力の度合いを考えるなど、お年寄りの中でも元気な人もいれば、耳が遠くなる、足腰が弱くなるなど、体が少しずつ衰えていく人もいるということに気づくことができた。

ボランティアのおじいさんや施設のお年寄りとの交流を通し、たくさんの人と出会い、温かく見守られることで、自分たちが周りの人にこんなに大事にされている、愛されているということを実感すると共に、“命のつながり”を体験の中から感じ取っているようだった。

島の自然や人々とかかわりながら、命を大切にする心を育む

— 南知多町立日間賀保育所 —

1 実践のねらい

- 海の自然や恵みに感謝し、島の人とかかわりを通して、やさしさや思いやりの心を感じとる。また、保護者も子どもと一緒に体験することで共に育とうとする気持ちを持つ。
- 野菜にも命があることを知り、愛情を持って友達と一緒に育てたり、収穫したものを調理したり味わったりするなかで、人に愛されることや協力しあうことのこころよさを感じる心を育てる。

2 実践の内容

(1) イルカとの触れ合い＝島にやってくるイルカに親しむ



- 島には毎年、水族館からイルカが夏休みで休養に遣ってきます。2ヶ月間島の住人となり、人との触れ合いもします。そのイルカと仲良くなれるよう、触れ合う経験をしました。インストラクターさんから「あまりびっくりさせないようそーとさわってね」「長い時間は遊べないの、イルカが病気になってしまうからね」という話を聞いたあと、上を向いて泳ぐイルカの手に触れた。「わーさわれた！」「かたいね」「ヌルヌルしたよ」と子どもたちはイルカにタッチできたことを喜んだ。

触れ合ったあとは目の前でジャンプしたり、回転したりするイルカを目を輝かせて見入っていたが、自分たちがやさしく接したことでイルカが元気よく泳ぎ回るのを見てほっとした表情だった。

(2) たこカレー作り＝島で採れるたこを食す

- 島の漁師さんをお願いをして年長児はたこつかみを体験した。怖がることなく何匹も捕まえる子、なかなか捕まえない子、逃げられてしまい追いかける子など様々であったが、子どもたちの歓声が響きわたっていた。

たこつかみをしない年中・年少児は、島のもうひとつの特産物である大あさり採りを体験した。手の中いっぱい到大あさりをかかえて離さない子もいたほど大喜びだった。



- 園で子どもたちと一緒に下ごしらえしたカレーの中に、海で採ったたこや大あさりを入れ、たこカレーを作りお母さんと一緒に食した。「タコおいしいよ」「おかわりー」「私もおかわりー」の声があちこちから聞こえ、友達やお母さんと海辺で食べるカレーは一層おいしく感じられた。



- カレーだけでは食べきれなかったタコは冷凍にして保存、命をいただくことに感謝し残ったタコも食べようという思いから、島の人はどうしているか知ることにした。たこ飯や干物にして食べることがわかり、給食でたこ飯を炊いて食べたり、干物にして食べた。島の干物作りの達人にお願いすると、気持ちよく引き受けてくれ、子どもたちは予定外の干物作りも体験した。

(3) 野菜の栽培と収穫、クッキング

- 島の温暖な気候は野菜作りには欠かせないこと、生長するために水や肥料が必要なことを繰り返し話をした。友達と一緒に水をかけることで、日々生長していく野菜を目で見て、皆と同じように命があることを知った。その命をいただくことで自分たちの身体が成長していくことを話し、いただきます・ごちそうさまの意味にもつなげて給食をいただいた。また、友達といっしょにクッキングをして、収穫したものを触り、匂いを嗅ぎ、味わうなど五感で感じながら、人に愛されたり、協力することの心地よさを感じとれるようにした。保護者と「ごはんができるまで」や、親子クッキングなど、共に体験する機会を持ったことで、子どもと一緒に育とうとする気持ちが持てた。



3 おわりに

この実践をするにあたり、島の特色あるものを生かせないかと考え取り組んだ。園内だけでは留まらないため、地域の人たちの協力がなければできないことばかりであったが、どんな時も気持ちよく力を貸してくれ、島の人々の温かさを感じられたことも成果のひとつである。

幼児は体験しながら、感じながら育っていくが、その時の保育士の感じかたやかかわりで、「命を大切にする」ということが伝わっていくものだということがわかった。今後もこの活動を継続して、島の自然や恵に感謝し、命の大切さを感じとれるようなかわりを心がけたい。

共に育てよう 大切な命

— 美浜町立南部保育所 —

1 実践のねらい

- 栽培、飼育、絵本の読み聞かせなどを通して、自らを含めたすべてのものに命があることを知らせ、命を育てよう、大切にしようとする心を育む。
- 自然の恵みや周りの人々に感謝し、食物に関心を持ちながら楽しく食べる。
- 健康な心と体をつくる望ましい食習慣を身につけるようにする。

2 実践の内容

(1) バケツとプールで稲作り 5歳児

- 種もみ選びからスタートし、土の準備、種まき、田植え、水の管理、稲刈り、脱穀、もみすり、おにぎり作りと半年間、稲作りに取り組んだ。子どもたちは、毎日「おはよう」「大きくな～れ」「おいしいお米になってね」と声をかけながら観察や世話をし、



おにぎり作り

稲の生長を見守る姿がみられた。残念ながら豊作とはいえなかったがそんな中で米作りの大変さや米1粒1粒の大切さに気づいたり、初めて自分で握ったおにぎりのおいしさを実感したりできたことは、貴重な体験となった。



田植え



稲刈り

(2) あおむしの飼育 4歳児

- 4月の誕生会で所長より、あおむしをプレゼントしてもらい「あおくん」と名付け、年中組で飼育することにした。給食時には、あおむしにも「ごはんだよ」とパセリをあげ「夜、ひとりではかわいそう」と家につれて帰って世話をする姿がみられ、自分たちと同じというやさしい気持ちが育っていることが確認できた。

「はらぺこあおむし」の絵本と比較しながら、幼虫→さなぎ→チョウになる変化、成長に目を輝かせていた。あおむしがケースのふたの部分にとまって、動かなくなり糸のようなものを出してさなぎになることやチョウになる前にさなぎがモコモコ動くことを子どもたち自らが発見した。チョウになって誕生会をした後、ケースから出して「バイバーイ」と見送った。

(3) 絵本の読み聞かせ 3歳児

- 「うんぴ・うんにょ・うんち・うんご」の絵本を読んで、食べることと同様に排泄することの大切さを知らせた。子どもたちは、「うんぴ」「うんにょ」「うんち」「うんご」のネーミングにひかれ、自分の便に関心を持つようになった。「バナナうんちだった」「うんごで痛かった」と保護者や保育士に伝える子も増えた。これを機に、3食しっかりよく噛んで食べる、排泄後はトイレトペーパーで拭く、流す、手洗いをするなどの基本的生活習慣の自立にもつながっていった。

(4) 野菜あそび 0.1.2歳児

- ミニトマトの栽培や5歳児が育てた野菜（玉ねぎ、ピーマン、オクラ）でスタンプあそびなどを通してオクラの毛やネバネバに気づいたり、玉ねぎの匂いをかいだり、採れたてトマトのおいしさを味わったりなど五感を使って感じとることができた。給食の野菜を「これ何?」「この前、スタンプやったお星様の形のオクラだね」と関心を示したり名前を言ったりすることから、包丁で切る、なべで炒めるのままごとあそびやレストランごっこに発展し、保育士と一緒に楽しんだ。



芋掘り

(5) その他

- 野菜の栽培（玉ねぎ、じゃがいも、なす、ピーマン、トマト、きゅうり、オクラ、さつまいも）祖父母の協力を得て保育所の畑で栽培する。収穫した野菜を使ってカレーライス、やきいもを作り、祖父母や保護者を招待して交流を深めた。
- 栄養のグループ分け
表を参考に「赤」「黄」「緑」のグループ分けや意味を知らせてきたことにより、給食は勿論、朝晩の自分が食べた食事に関心を持つようになった。3つのグループの物を食べようと心がけ、不足していると母に訴える子も出てきた。また、調理室に「今日のお食事は何ですか?」と聞きに行く子も多く、調理員とのよい関係も築くことができた。
食べることで自分の命に結びつくことを知り、食品や作ってくれた人に感謝の気持ちが育った。

3 おわりに

- 当保育所は自然環境に恵まれ、地域の方々も協力的で、子どもたちは多くの愛を体いっぱいを受けとって成長している。今年度、実践に取り組み、この環境が十分に生かされていたか、また五感を通して直接体験することの大切さを再認識する機会となった。
これからも家庭、地域と連携して、子どもの大切な命の成長を支援していきたい。

みんなで守ろう！大切な命

— 武豊町立東大高保育園 —

1 実践のねらい

かけがえのない命だから、子ども達に自分を守る方法を、人形劇や紙芝居を通して知らせていく。そして、優しさや思いやり、協力や命を大切にする心を育む。

2 実践の内容

(1) 命に関する人形劇の鑑賞、絵本・紙芝居の読み聞かせなどの取り組み

○「命」をテーマとした人形劇の鑑賞「ごんぎつね」・「雨ふらんでケロ」

人形劇鑑賞を通して、命あるものへの優しさや、人を愛する心を伝え、「人が死ぬ」ことがどんなに辛く悲しいことなのかが心に残り、子どもなりに「命の尊さ」も学ぶことができた。

7月14日上演 夢中座

「雨ふらんでケロ」

10月2日上演 よろず劇場とんがらし

「ごんぎつね他」



「ごん、かわいそうだったね」

○「生と死」に関する絵本や紙芝居の読み聞かせ



「虫は、優しく持つんだよね」

保育士が絵本や紙芝居の内容を吟味した中で写真絵本や図鑑も利用した。姿形や、生息場所、食べ物、成長過程も順を追って示してくれる。そこには、どんなふうに生まれ、成長し死んでいくのか、というドラマはないが、生き物がさまざまな知恵と能力を発揮して、精一杯生きていくことを教えてくれた。命の重みを感じさせてくれ、自然の中にでかけても、なかなか見ることのできない決定的瞬間がドラマチックに描かれていた。保育士も、子どもに質問され答えられなかった部分も、物語絵本と違って写真絵本や図鑑を見ることで、一緒に考えることもできた。

○ 幼児期に適した絵本の解説、園だよりを通して家庭へ啓蒙していく

人形劇の上演内容を掲示板や園だよりで知らせ、登降園の時間に保護者からどちらの話も「家族で命の大切さや尊さを話し合うきっかけになりました。」「ごんぎつねは、小学校の教材にもあるので兄弟での話に花が咲きました。」と帰宅後、家庭での姿が伺えて良かった。

(2) 動物の飼育・ふれあい、植物の栽培、自然観察、体験活動などの取り組み

○ 小動物などの身近な動物の飼育

子ども達が持ってきたザリガニを飼育することをきっかけに、初めは、怖くて触れなかったりケースを叩いたりしていた子も、年長児が触り方を知らせることで、エサを食べる様子を観察し、優しく扱うことができようになった。尾ひれで進む姿や卵を持っていることに喚声を上げる姿もみられた。産卵を楽しみに、そっと大切に扱う姿も見られ生命の誕生を楽しみにする子ども達の真剣さが伝わってきた。

○ 野菜や花などの栽培。栽培した野菜を食べる

園の畑や各クラスの前のプランターに夏野菜(ピーマン・オクラ・ナス・きゅうり)を植え、水やり、草取りをしながら生長を観察し収穫の喜びを味わうことができた。その中で野菜によって花の色が違うこと、花が咲き実をつけることなど生長の違いを知ることもできた。保護者からは、食べられなかった野菜も保育園で栽培し、世話をすることで「家では食べたことがないのに、おいしいと食べてくれた。」と嬉しい報告を受けた。



「ナスがとれたよ。給食にいれてね」

(3) 親と子の絆を深める取り組み、親への啓発、お年寄りとの交流などの取り組み

○ 敬老会・祖父母会での取り組み

敬老会では近くの公民館に出かけ、踊りなどを披露した。祖父母会では交流の日を楽しみにする言葉が聞かれ、お年寄りと伝承あそびや触れ合う中で親しみが増し、どの子も笑顔で楽しい一日を過ごすことができた。祖父母の温かいまなざしや温もりも感じることで、自分達は大切にされているという気持ちが実感できた。

3 おわりに

保育園の園児を見ていると、人とのかかわりや生活体験が非常に乏しいことが感じられ「命の大切さ」を幼児期に伝えるには、さまざまな体験をする中で、感動や驚き、喜びや悲しみなど心を動かすことが必要ではないかと思われる。具体的な体験を一つ一つ積み重ねる中で、子どもの心を動かし、何かを感じ取り、それが「命を大切にすること」に結びつくのではないか。そして子ども達の心の動きが感じとれる保育士でなければと痛感した。

心身共にたくましく感性豊かな明るい子ども

— 一色町立西部保育園 —

1 実践のねらい

- 野菜を育て、収穫した野菜をクッキングして食べることで「おいしかった」という満足感を味わう。
- 家族や周りの人達から愛されていることを実感する。
- 地域の皆様と世代間交流を持ち、目上の人に対し尊敬する心を育む。

2 実践の内容

(1) クッキング（カレーライス作り）

- 10月に秋じゃがの種芋を一人ひとり保育園の畑に植えた。芽が次々に出だすと自分の植えた場所を見ながら「なかなか出てこないな」「どうなったのかな」と心配をする子どもの姿が見られた。しばらくして、芽がでてくると「先生みて！ほら出てきたよ」とうれしそうに全員の保育士に声をかけていた。どの子どもともうれしそうだった。

カレーライス作り当日は野菜を洗ったり、皮をむいたり、切ったりと多くの作業を経験した。出来上がったカレーライスは、大きな玉ねぎやにんじんも入っていたが、野菜嫌いな子どもも「おいしい！」とたくさん食べ「食への関心」を深めることができた。



(2) 誕生会に誕生児の保護者からのメッセージ紹介（赤ちゃんの頃の写真披露）

- 誕生会には、生後間もない頃の写真をみんなに紹介した。保護者からのメッセージを保育士が読みあげると子ども達は一生懸命聞き入り、感激のあまり泣き出す子どももいた。どの子どもも自分がどんなに大切に育てられているか、親がどのような思いで育てているかなど、メッセージから伝わり「愛されている」ことを実感できた。これからも日々の保育の中で、子ども一人ひとりに「先生は、あなたを愛しているよ」のメッセージを発信していきたい。



(3) シニア健康プラザ・ケアガーデンの訪問

- 年に2回、年長児がケアガーデンを訪問し「劇あそび」や「歌・ミュージックベル」を披露した。衣装をつけて一生懸命発表している子ども達の姿に「かわいい・かわいい」を連発され、涙を流すお年寄りの姿も見られた。子ども達のかわいい手で肩たたきをしたり、肩をもんであげたりすると、「ありがとう」と手を差しのべて何回もお礼を言われたいへん喜ばれた。子ども達は「おばあちゃん！泣いていたね」「優しく肩たたきしてあげたよ」「おじいちゃん・おばあちゃんの手しわしわだったね」など感想を話していた。優しい気持ちで接し、おじいちゃん・おばあちゃんに喜んでもらった時、どの子どもとってもうれしそうだった。交流をしたことで優しくなれたり、お年寄りを大切にしようという気持ちを持つことができた。



(4) 絵本の読み聞かせ「うちにあかちゃんがうまれるの」

- この絵本は自宅出産が実際の写真で表現してあるので、子ども達は興味津々で一生懸命聞き入っていた。「赤ちゃんとお母さんのおへそが、どうしてつながっているのかなー」「生まれるところがすごい！」など、思い思いに感想を話していた。子ども達は生命の誕生の素晴らしさや不思議さに深く感動したようだ。この絵本の中からは、赤ちゃんの心臓の音は実際には聞き取れないが、子ども達の心の中には聞こえたようであった。



3 おわりに

- このテーマに取り組んだことで、保育士の関わりは子どもの心の育ちに大きく影響することを再確認した。そして、保護者もメッセージを書くことで子育て、命を大事にする心について考えるきっかけになったと思う。今後も保護者・地域と連携を取り、子ども達の「たくましく、生きる力の芽」を一緒に育んでいきたい。